

# 大阪歴史博物館が所蔵する河内地方の縄文土器

松尾 信裕

## はじめに

現在、大阪歴史博物館は日本各地の考古学資料を所蔵している。その中に、大阪府下の近世以前には河内と呼ばれていた地域の縄文土器が含まれる。これは大阪府下の主に北河内と呼ばれる地域の遺跡から出土した資料で、戦前から戦後にかけてその地域で考古学活動を継続されていた片山長三氏から寄贈を受けた資料で「片山コレクション」と呼んでいる。

2019年の1月23日から3月18日までの間、大阪歴史博物館では8階特集展示室において『森の宮遺跡と河内地方の縄文土器』と題した展覧会を開催した。この展覧会において、森の宮遺跡や市内の遺跡から出土した縄文土器に加え、この片山コレクションの中から時期が判明する土器を展示し、河内地方の縄文時代遺跡の概要や出土土器の特徴について閲覧に供した。

その展覧会では展示品の全てをリーフレットに収めることができず、ごく一部しか掲載できなかった。そこで今回改めて、大阪歴史博物館が所蔵する河内地方の縄文土器を紹介し、それぞれの時期を特定していくことにした。

## 1. 各遺跡出土の縄文土器

### 1. 穂谷遺跡出土石器および縄文土器（考1218～1239）

穂谷遺跡は枚方市穂谷の集落の北、三之宮神社付近に広がる遺跡である。淀川支流の穂谷川上流にあたり、東西を150mほどの山地に挟まれた穂谷川が開削した谷あいの、標高約120mの段丘上に立地している。大正14年（1925）に片山長三氏によって発見され、昭和27年（1952）に最初の発掘調査が行われ、縄文時代早期後半の押型文土器が出土した。すぐ西には穂谷川が刻んだ谷が流れ、神社境内から北は少しずつ低くなっている。北の穂谷公園には穂谷遺跡の案内看板がある。

平成2年（1990）に枚方市文化財研究調査会がこの公園敷地を再度発掘調査している。この時の発掘調査では、早期の穂谷式土器に先行する押型文土器や穂谷式土器と条痕文土器、前期の北白川下層式、中期の船元式土器が出土している〔枚方市文化財研究調査会1992〕。

片山氏は大正14年（1925）にこの地を訪れ、土器片を採集されている。そして、戦後の昭和26年（1951）に四條畷高校の生徒たちとともに再訪され、縄文土器を発見され、翌27年に現在



写真1 穂谷遺跡遠景

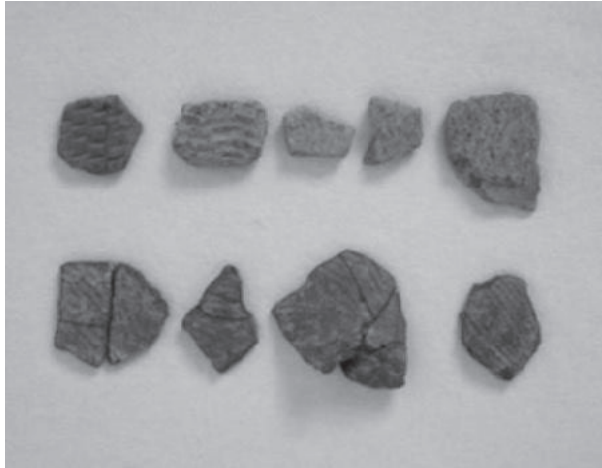


写真2 穂谷遺跡出土土器

遺跡地の地層は大きな攪乱を被っており、この発掘調査で縄文土器と須恵器が混在していることが確認され、遺物の採集に主眼が置かれたようだ。押型文土器はゆるやかな波形の山形文で器面を飾るもので、穂谷式土器と命名された。穂谷遺跡出土の縄文土器は9点保管している(写真2)。昭和42年(1967)3月に刊行された[枚方市1967]には、大阪市立博物館蔵として穂谷遺跡出土土器が13点掲載されているが、大阪歴博で現在確認できるのは9点で、押型文と条痕文土器である。[枚方市1967]には押し引き文や爪形文が掲載されているがそれらは確認できなかった。逆に、保管している資料には[枚方市1967]に掲載されていない土器も存在している。こうなった経緯は現在の段階では明らかにできない。

保管資料は地文の施文手法から2種類存在している。一つは緩やかな振幅の山形文の押型文土器で、もう一つは内外面とも二枚貝条痕調整の土器である。

山形文を持つ土器片の1点は口縁部破片である(写真2上段左端から2点目)。口縁部は内外面に横方向に山形文を施し、口縁端部外面に大きな刻み目を施す。写真2上段右端の破片は体部下半で、粘土の剥離面が残る。器壁は厚い。体部の厚さは9mm、口縁部は12mmの厚さがある。灰褐色を呈し、焼成は良好である。

内外を二枚貝条痕調整する4点の土器の内、3点は同一固体の破片で、底部片を含む。赤褐色を呈し、胎土内に角閃石を含む。底部破片は尖底ではなく凹底で、底部近くまで条痕調整を行う。時期が下るものであろう。もう1点の破片は色調が茶褐色。これも角閃石を含んでいる。両者とも器壁は薄く、6mmほどである。

これらと一緒に保管している石器にはトロトロ石器や木の葉状尖頭器・横型石匙・石鏃がある(写真3)。

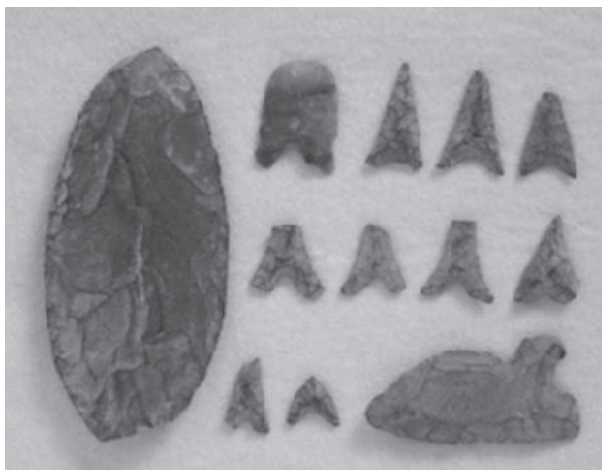


写真3 穂谷遺跡出土石器

トロトロ石器は全長28mm、幅21mm、厚さ4mmを測る。周囲には剥離痕があるが、体部中央は両面とも磨いている。先端は丸く仕上げ、基部には弧状の抉りを作り、両脚は対称にはなっていない。材質は同定しておらず不明である。

木の葉形尖頭器は全長99mm、幅46mm、厚さ12mmを測る。片方の刃部は先端から末端まで打ち欠いているが、もう片方の刃部は先端部に自然面を残す。基部も自然面が残る。横型石匙は全長53mm、刃部幅24mm、厚さ6mmを測る。

木製の葉状尖頭器は全長99mm、幅46mm、厚さ12mmを測る。片方の刃部は先端から末端まで打ち欠いているが、もう片方の刃部は先端部に自然面を残す。基部も自然面が残る。横型石匙は全長53mm、刃部幅24mm、厚さ6mmを測る。

石鏃は9点ある。[枚方市1967]に掲載されている7点の石鏃以外に2点の石鏃がある。基部の抉りが目立つ。最大長27mm、幅15mm、厚さ4mmである。

この一群に混じって特殊押型文と呼称されるネガティブの楕円押型文土器が1点存在している(写真2上段左端)。この土器は、片岡肇氏が大阪市立博物館で片山氏寄贈の穂谷遺跡出土土器群を観察された際、その中に1片の神宮寺式土器を見出し、その土器片が片山長三氏と一緒に発掘に携わった西尾宏氏のメモによって、神宮寺遺跡出土の土器と確認されたものである[片岡肇1972]。

穂谷遺跡出土として保管している神宮寺式土器は楕円押型文を施す。押型文の1端に5mmほどの空白部あり。空白部を挟んで再び楕円押型文が一つかろうじて観察できる。押型文は3列が高さをそろえて並び、その隣に一段低くなった位置から始まる押型文がある。この4列が一周の回転で施文されたを見ると、縦刻みに4条の突起列が刻まれていると推定できる[岡本東三1980]。土器片の曲面から判断して、押型文は縦方向に施文している。色調は茶褐色で焼成は良好である。堅致で遺存状況も良い。器壁は薄く7mmを測る。

神宮寺遺跡は交野市神宮寺に所在する。生駒山地北部の山なみがなだらかな丘陵へと変換する傾斜地に形成された神宮寺集落の南端にある。遺跡地の東には山塊がそびえ、西には大阪平野へと続く枚方丘陵が広がる(写真4)。遺跡地の南には生駒山系から天野川支流の小川が流れ下る。現況は遺跡地一帯にミカン畑やブドウ畑が営まれ、その一角に「神宮寺縄文時代住居遺跡」と書かれた石柱が立つ。

昭和32年(1957)に片山氏らによって最初の発掘調査が行われ、多くの縄文時代早期の押型文土器が出土した。土器の表面にはネガティブな楕円文(窪んだ楕円形の文様)が施され、その特異な文様から神宮寺式土器と命名された。

## 2. 星田旭遺跡出土縄文土器(考1165~1217)

星田旭遺跡は交野市星田の旧集落から南東へ入っていき、山地と丘陵の傾斜変換線付近にある。眼前には樹木が生い茂る山地が迫りその裾に老人ホームの建物が建つ。老人ホームに入る傍示川に掛かる橋の手前には「星田旭縄文時代住居址」の石碑が立つ(写真5)。老人ホーム背後の山林が遺跡地であるが、私有地であるため立ち入る



写真4 神宮寺遺跡遠景



写真5 星田旭遺跡遠景

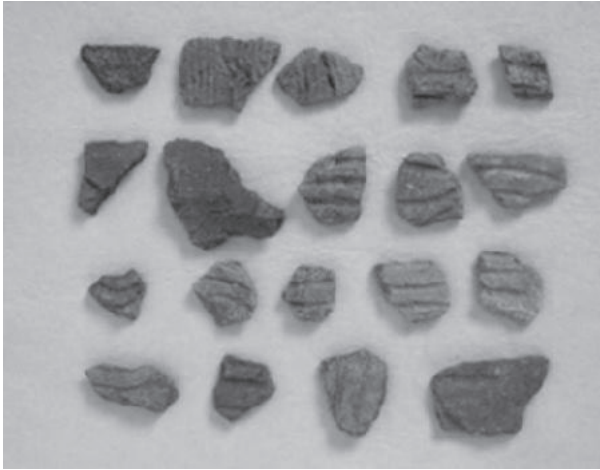


写真6 星田旭遺跡出土土器



図1 星田式土器復元図  
〔岡田茂弘1965〕より転載

ことができない。

明治41年（1908）、四条畷中学在学中の片山氏によって発見され、昭和9年（1934）に片山氏らによって発掘調査が行われ、縄文時代中期の土器が出土した〔交野町役場1963・交野市1992・枚方市1967〕。

大阪歴博に保管する星田旭遺跡出土縄文土器は、太い沈線や押し引き沈線で渦などの文様を描き、沈線間に縄文を施す充填縄文である（写真6）。肥厚する口縁部に縄文だけを施すものもある。体部には縦位の縄文を施す。北白川C式土器の範疇である。これらに混じって撚りの硬い縄文を施す土器片が3点ある（写真6上段左端から3点）。口縁部外面と口縁端部内面に船元Ⅱ式土器の縄文に似る。

ただ、大阪市立博物館が昭和45年に刊行した館蔵品目録〔大阪市立博物館1970〕に掲載されている「考1165～1217」の土器片は現在確認できていない。それらは近畿地方の縄文中期末に東日本の影響を受けた土器として、星田式土器が設定されている〔岡田茂弘1965〕。復元図化されたそれは口縁部には縄文地文の上から連弧文を施し、体部との境に波状文をめぐるせ、体部は縦方向の縄文帯を施す（図1）。この復元図から館蔵品目録に掲載された土器片から復元されたものと判断できる。



写真7 岡山遺跡遠景

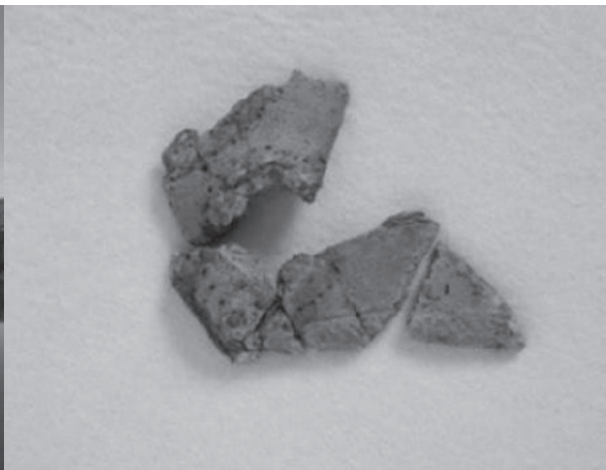


写真8 岡山遺跡出土土器（1）

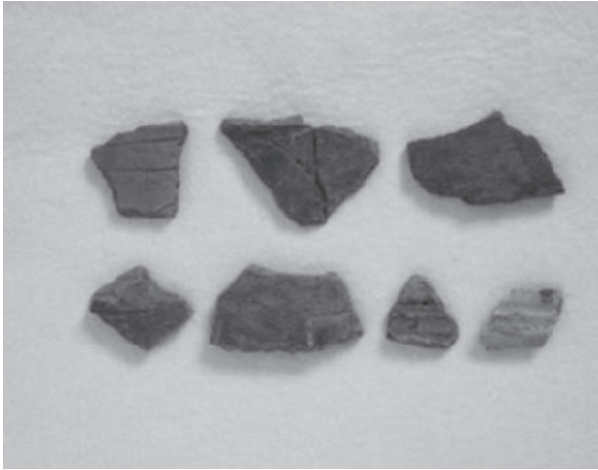


写真9 岡山遺跡出土土器（2）



写真10 岡山遺跡出土土器（3）

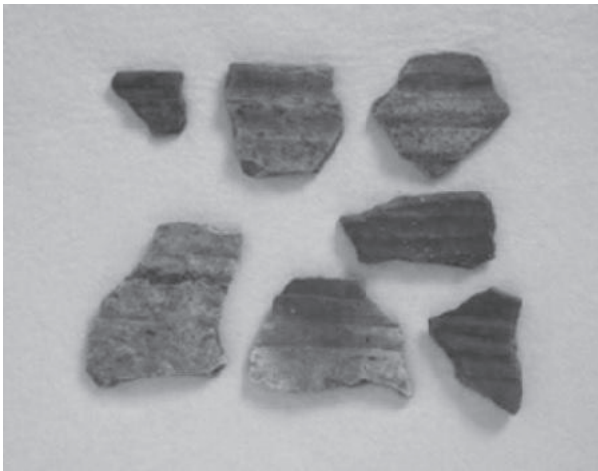


写真11 岡山遺跡出土土器（4）



写真12 岡山遺跡出土土器（5）



写真13 岡山遺跡出土土製品（6）



写真14 岡山遺跡出土土器 (7)



写真15 岡山遺跡出土土器 (8)

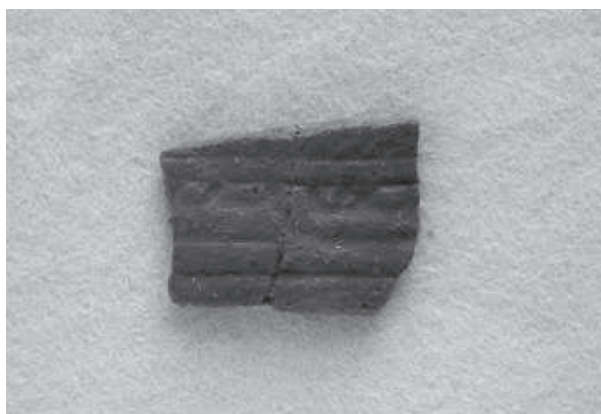


写真16 岡山遺跡出土土器 (9)

### 3. 岡山遺跡出土縄文土器 (考1126~1153・1532・1533)

岡山遺跡は四條畷市岡山四丁目とあることから、現在、四條畷市で更良岡山遺跡と呼ばれている遺跡である。寝屋川市との境を流れる讃良川の南にある岡山新池の北岸で、昭和19年(1944)に片山氏によって発見され、戦後の昭和24年になって最初の発掘調査が行われている。遺跡地は岡山新池の北東部に広がり、讃良川の河岸段丘から、北の段丘上に広がるようだ。岡山新池に面する調査地付近ではいまだ池に続く湿地堆積や畑が広がっているが、一步北に離れるとコンクリートブロックの護岸が続く讃良川や北の段丘に続く斜面にはマンションや倉庫などが建ち並んでいる(写真7)。

これまでの調査で出土した縄文土器は縄文時代後期初頭の中津式土器を始め、後期後半の一乗寺K



写真17 日下遺跡標石

式土器・元住吉山Ⅰ式土器・Ⅱ式土器・宮滝式土器。晩期の滋賀里Ⅱ~Ⅳ式土器が出土している[四條畷市2016]。大阪歴史博物館に所蔵している土器には後期の一乗寺K式土器から元住吉山Ⅰ式・Ⅱ式土器・宮滝式土器、晩期の滋賀里Ⅲ式土器がある(写真8~14)。最初の調査で出土したものが大阪市立博物館で展示されていた高杯形の元住吉山Ⅱ式土器と深鉢形の元住吉山Ⅱ式土器である(写真13)。土器片には注口土器と考えられる破片が多い。また、土製の耳栓や

丸玉も存在している（写真14）。

このほかにも「讃良川河床」とした土器群がある（写真15）。この土器群には「更寺遺跡」とも注記されている。讃良川は寝屋川市と四条畷市の市境を流れる河川で、更良寺跡は更良岡山遺跡とほぼ同じ範囲に存在している。寝屋川市の讃良川遺跡からは縄文中期の土器が出土する遺跡で、後期後半の土器は出土していない。この遺物群は更良岡山遺跡出土土器の可能性もある。出土土器の時期は後期の元住吉山Ⅰ式・Ⅱ式土器で、この中に東北地方の縄文晩期大洞式土器と想定できる文様を持つ土器が1点ある（写真15右下、写真16）。

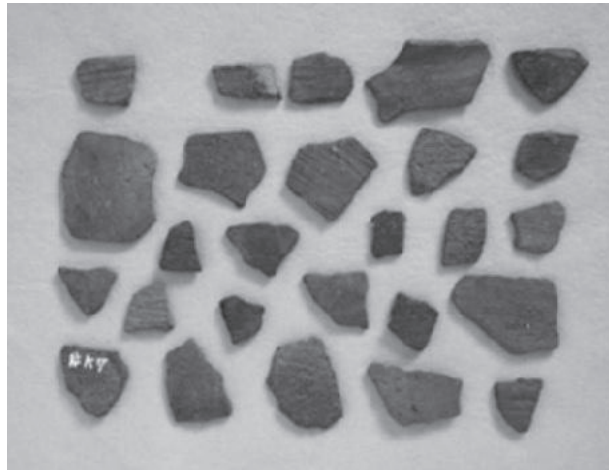


写真18 日下遺跡出土土器

#### 4. 日下遺跡出土縄文土器（考1314～1353）

東大阪市日下町一帯に広がる日下遺跡は大正14年（1925）に発見され、昭和46年（1971）に森の宮遺跡の第1次調査で森の宮遺跡に縄文時代貝塚の存在が明らかになるまでは、大阪府下唯一の縄文時代の貝塚として知られていた。遺跡地は生駒山地の西裾で、東高野街道の東に広がる扇状地である。南に日下川が流れ、北には日下大池（現在は孔舎衛東小学校のグラウンド）や日下今池などが築かれている谷筋があり、遺跡地は谷に挟まれた標高20～24mの傾斜地となっている（写真17）〔東大阪市遺跡保護調査会1978〕。



写真19 船橋遺跡遠景

淡水産のセタシジミの貝塚からは縄文時代晩期の土器が出土しており、縄文時代晩期には河内湾が淡水化し、湖へと変わっていたことがわかる。これまでに30体を越える人骨が発見され、一部では墓が環状に配置されていることが判明している。昭和47年（1972）に国指定史跡となった。



写真20 船橋遺跡出土土器

大阪歴博で保管する縄文土器は縄文晩期の土器で、多くが体部の破片である（写真18）。上段



写真21 国府遺跡近景

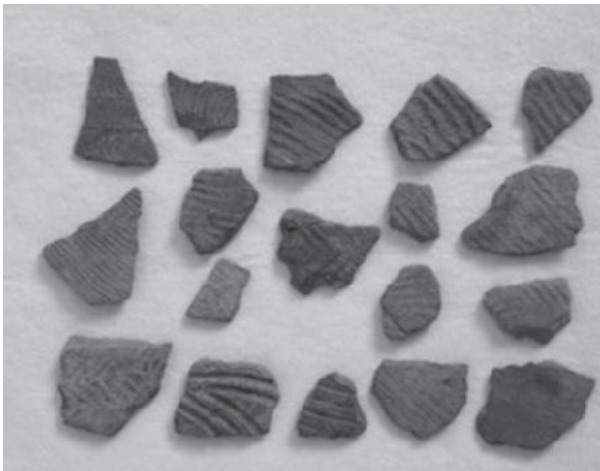


写真22 国府遺跡出土土器



写真23 国府遺跡出土球状耳飾り

左端の土器は口縁部の破片で、外面には二枚貝条痕が残る。その右の土器も口縁部であるが外面調整はナデである。最下段右端は沈線を数条めぐらせており、有文の鉢になろう。滋賀里式Ⅲ式土器の範疇であろう。

### 5. 船橋遺跡出土縄文土器

柏原市と藤井寺市の市境を流れる大和川河床を中心に広がる(写真19)。現在の大和川は江戸時代に今の流路に付け替えられたため、それ以降、流れに削られ、遺跡が露出するようになった。ここから出土した縄文土器は縄文時代晩期末の突帯土器で、口縁部と頸部に粘土紐を貼り付け、その上から刻み目を施す。底部は平底である。口唇部上端に刻み目を施し、頸部に突帯を貼り付けず、底部が尖るといふ滋賀里Ⅳ式土器とは大きな違いがあり、滋賀里Ⅳ式土器より新しい土器と考えられ、船橋式土器と命名された。

大阪歴博に保管する船橋式土器は3点で(写真20)、2点は口縁部から体部の破片で、もう1点が体部破片である。口縁部の突帯は口縁端部から少し下がった位置に貼り付けられ、口縁部上端には刻みがないことから船橋式土器とわかる。左側の大型破片は口縁部内面に口縁部に平行する沈線がある。これも船橋式土器の特徴の一つである。頸部の突帯が残る体部破片は、大き目のD字刻みがある。これだけでは滋賀里Ⅳ式土器か船橋式土器かの判断は下せない。

### 6. 国府遺跡出土縄文土器(考2817~2856)

藤井寺市惣社に所在し(写真21)、船橋遺跡の南に隣接する遺跡で、縄文時代前期から晩期までの土器が継続して出土する。縄文時代前期には縄文海進により遺跡の北に河内湾が広がっていたと推定できる。大正6年(1917)、京都帝国

大学濱田耕作教授によって初めて本格的な発掘調査が行われ、3体の人骨と縄文土器や弥生土器が発見された。出土した縄文土器は半裁竹管による爪形文を施す北白川下層式土器で、縄文時代前期のものである。この遺跡から古代人骨が発見されることが日本人起源論争に火をつけた。遺跡からは現在までに90体を越える人骨が発見されている。

大阪歴博に保管する土器には縄文土器以外に弥生土器や須恵器の破片も含まれている。その中から縄文土器だけを選び記述する。縄文土器にはC字の爪形文を施す土器と、縄文地の土器、沈線文土器、そして条痕地の土器がある（写真22）。条痕地の土器は爪形文や縄文地の土器の一部の可能性がある。沈線文土器（最下段左から二つ目と三つ目）は縄文後期の北白川上層式土器の可能性はある。

爪形文土器は2点（写真22上段左端2点）で、左端の土器は口縁部が残る。体部には大型の爪形文を連続させる。右側の爪形文土器も小さな破片で、爪形以外の文様は見えない。縄文地の土器片は節の大きな縄文と小さな縄文がある。また羽状縄文と見える破片もある（写真22中央の1点と最下段左端）。爪形文土器を北白川下層Ⅰb式とするかⅡa式とするのか難しいが、資料群に縄文地の土器が多く含まれるためⅡa式が良いのかもしれない〔藤井寺市教育委員会1998〕。

また大阪歴博には国府遺跡出土とする球状耳飾りを保管する（写真23）。それは半分だけが残るもので（写真23左側）、半分は後世の補修復元である。これまで国府遺跡からは14点の球状耳飾りが出土しており〔天野末喜2010・関西大学博物館2017〕、この例も含まれている。

## 2. 片山コレクション縄文土器

大阪歴史博物館はその前身が大阪市立博物館で、昭和35年（1960）開館と大阪府下でも歴史が古く、戦後の歴史・考古学ブームにのって、大阪府下各地で発見される資料の受け口となっていた。それを示すのが今回紹介した北河内地方の縄文時代遺跡から出土した縄文土器群である。これらの縄文土器群は北河内をフィールドとされていた片山長三氏による発掘調査で出土した資料や採集された資料である。片山氏が活躍されていた昭和初期から昭和30年代前半頃には、大阪府下には考古学の専門博物館はなく、昭和6年に開館し歴史全般を扱っていた大阪城天守閣が、考古資料も含め広く歴史資料を収集展示していた。しかし昭和35年に大阪市立博物館が開館すると、考古学関係の資料は大阪市立博物館に受け入れられることが多くなり、片山氏の資料も大阪市立博物館が寄贈を受け入れた。

明治27年（1894）生まれの片山氏は、旧制四條畷中学校在学中に枚方市星田旭遺跡を発見し、大正14年（1925）には枚方市穂谷の三之宮神社の北で縄文土器を採集された。このときの土器片が館蔵資料に含まれているのかは不明である。同じ年に旧石器時代の枚方市津田三ツ池遺跡も発見されている。大阪歴博には津田三ツ池遺跡出土とする石器群が保管されているが、津田三ツ池遺跡は昭和26年に発掘調査を行っており、そのときの出土品かもしれない。昭和7年（1932）と昭和16年には星田旭遺跡を発掘、昭和19年には四條畷市の更良岡山遺跡を発見、戦後の昭和25年に更良岡山遺跡を発掘、26年に穂谷遺跡を発掘、そして昭和32年には交野市神宮寺遺跡を発見され発掘調査を実施された。

これまで述べた遺跡はその出土品が大阪歴博に所蔵されており、北河内地方だけでなく近畿地方の縄文土器の研究には欠かせない資料である。片山氏の発掘調査で出土した縄文土器は、この当時の近

畿地方では縄文土器の出土例が少なかった。そのため、早期では神宮寺式土器や穂谷式土器、中期では星田式土器と、それぞれは標識土器となった。星田式土器は現在では北白川C式土器の範疇に含まれるようになったが、神宮寺式土器は今でも押型文土器の前半の編年研究に重要な位置を占める。穂谷式土器は高山寺式土器と同じく押型文土器の最終型式として位置づけられている [泉拓良1996]。

岡山 (更良岡山) 遺跡出土の元住吉山Ⅱ式の高杯形土器 (写真13) は特異な器形ということもあり、器形のわかる縄文土器が少なかった近畿地方の後期土器の一つとして取り上げられていた [岡田1965]。この高杯形土器は表面の遺存状況は良く、丁寧に磨いている。同時に出土した深鉢も残りが良い。

この当時、近畿地方の縄文土器研究は関東地方より大きく遅れていたが、片山氏によって枚方市穂谷遺跡や交野市神宮寺遺跡・星田旭遺跡が発見されたことによって、近畿地方の縄文土器研究は一躍進捗していった。大阪歴史博物館に所蔵する片山氏寄贈の縄文土器は、近畿地方の縄文土器研究の記念碑といえる土器群なのである。

#### 参考文献

- 天野末喜2010、「近畿地方出土の玦状耳飾に関する覚書」『玉文化』第7号  
泉拓良1996、「近畿地方の縄文土器」大川清・鈴木公雄・工楽善通編『日本土器事典』雄山閣出版  
大阪市立博物館1970、『大阪市立博物館藏品目録』  
岡田茂弘1965、「縄文文化の発展と地域性 近畿」『日本の考古学』Ⅱ 縄文時代、河出書房新社  
岡本東三1980、「神宮寺式・大川式押型文土器について」『藤井祐介君追悼記念考古学論叢』  
片岡肇1972、「神宮寺式土器の再検討」『月刊考古学ジャーナル』8月号、No.72  
交野町役場1963、『交野町史』  
交野市1992、『交野市史』  
関西大学博物館2017、『河内国府遺跡発掘100周年』関西大学博物館2017年度春季企画展図録  
四條畷市2016、『四條畷市史』第5巻 (考古編)  
東大阪市遺跡保護調査会1978、『東大阪遺跡ガイド』  
枚方市1967、『枚方市史』第1巻  
枚方市文化財研究調査会1992、「6 穂谷遺跡」『枚方市文化財年報』12 (1990年度分)  
藤井寺市教育委員会1998、『国府遺跡』藤井寺市文化財報告第18集